

土方巽・暗黒舞踏の受容と変容(1)

—国際化社会における研究現状と論文の
オリジナリティの問題・栗原論文を事例に—

京都精華大学 三上賀代

目的と方法：

慶応義塾大学アートセンター・土方アーカイブでの土方「舞踏譜」等の整理公開、2002年8月開催「舞踏サミット」(於・東京)、河村悟、清水正による土方著『病める舞姫』論やフランスでの『Butohs』の出版、大学院生他による舞踏研究等ここ一年間にも舞踏をめぐる言説は活況を呈するかに見える。しかし、土方及び舞踏の何がどこまで明らかになっているかは定かでない。

国内外の舞踏研究現状把握と舞踏家の土方受容と変容についての国際研究プロジェクトの第一として本論では、世界で二人の土方研究学位保持者である三上賀代著『器としての身体—土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』(ANZ堂1993.4)と栗原奈名子『Hijikata Tatsumi: The Words of Butoh』(米 The Drama Review 2000春)及び、栗原学位論文「The Most Remote Thing in the Universe: Critical Analysis of Hijikata Tatsumi's Butoh Dance」(New York University 1996.9)を「論文のオリジナリティ」の観点から比較考察する。両論の比較考察をとり上げたのは、米、舞踏研究者の、両論が「セイム アイデア」という私的発言による。この発言は、『器』本の元となった世界初の土方研究論文である三上「土方巽研究—舞踏技法試論」(お茶の水女子大修士論文1991.3)のパイオニア性が、栗原論文中の参照表記不適切、不明記によって侵犯されていることを示す。本論によって、国際化情報化社会における研究の持つ危険性と舞踏研究現状の一端が明らかになると考える。

考察：

I 『器』本とドラマレビュー論

身体と言語の関係から土方舞踏理念と技法の解明という目的、研究者自らの舞踏体験を基に土方言語解説という方法、土方「舞踏譜」を含む土方言語解説の困難さと必要性、社会的文化的背景の中での土方個人史から舞踏成立への過程と理念確立の基盤、作品史中のテーマと技法の継続と変遷、伝統芸能との関係、「衰弱体」と「消える」の観点から舞踏と身体の考察、土方舞踏の身体観が果たす役割という結論までの構成と論旨の類似。栗原論文に添付された土方原文翻訳資料と三上論主要論考引用箇所の類似。

以上の類似と、土方「舞踏譜」初出考察が三上論の特徴であり、技法によって肉体を「reconstruct」できるとする栗原論は、1989年より「Deconstruction」のテーマで、土方研究発表を続けてきた三上論に類似する。にも関わらず、栗原論には先行研究としての三

上論の表記がない。

尚、本栗原論において世界で初めて翻訳公表された土方原文中、最重要タームのひとつである「風だるま」は「Kaze Daruma」ではなく「Kaza Daruma」の誤りである。今後世界的に一次資料として引用される土方原文翻訳者の責任は大きい。

II 『器』本と栗原学位論文

目的、方法、構成、論旨の類似はIに重なる。

「shamanism」「transform」「sacrifice」「passivity」

「negativity」「experience」「becoming」「nerves」

等キーワード、及び「jumps without jumping …」「a condemned prisoner」他同引用による主要論考の酷似、「mushikui」「walk as length」等同様資料による考察他、三上論参照引用の不明記、不適切。栗原論文中、土方カルト論考における三上論引用箇所での事実誤認。

合田成男の土方舞踏史中「バンザイ女」「嫁」の位置付け、東北の記憶と身体の関係と技法確立の時期、芦川作品のモチーフ「からゆきさん」論考他、参照引用不明記、不適切による先行論の侵犯。

骨子の論考において三上論との類似性が認められるにもかかわらず、参照表記された三上『器』本のサブタイトルがなく、『器』本が、三上修士論文に基づくことの記載がないこと、及び事実と考察の混同による先行論の侵犯は、栗原論論文のオリジナリティそのものが問われるものである。

結論：

論文のオリジナリティは、新所見、新方法、新資料の提示によって認められ、先行論に対しての「新」であり、オリジナルである。

「セイム アイデア」発言によって三上論のパイオニア性が侵害された事実は、『器』本のサブタイトルは「見落とし」た、「三上学位論文は知らなかった」(弁護士を通しての質問に対する栗原氏の回答)ということと許される範囲のミスであるのか。海外でのみ土方研究発表をする栗原氏の姿勢は、研究者として「アン フェア」である。

また、明らかな類似性が認められるにも関わらず、論考初出も理解できず、栗原論文のみを先行研究として上げる大学院生の土方研究発表や「海外の方が舞踏研究は進んでいる」と公言する舞踏研究者のいる事実は、舞踏研究が本質的には進んでいないのではないかとこの危惧を抱かざるを得ない。

この事例は研究史の確立が待たれる舞踊学全般の問題を示す。本論への栗原氏の『舞踊学』誌上での反論、及び舞踊学会において本論の妥当性の討議審判が行なわれることによって、公平な土方研究の現状認識と進展がなされ、「論文のオリジナリティの保証」という学会の機能が果たされるものと考えられる。

(京都精華大学創造研究所助成)